

昭和十五年四月
文書院大蔵部科新入生招見式

H-0185

0247

文化事務部

森

贈呈

東亞同文書院大學豫科新入生徒招見式

昭和十五年四月十九日於霞山會館

要録

同書院大學豫科新入生徒

法財 東亞同文會

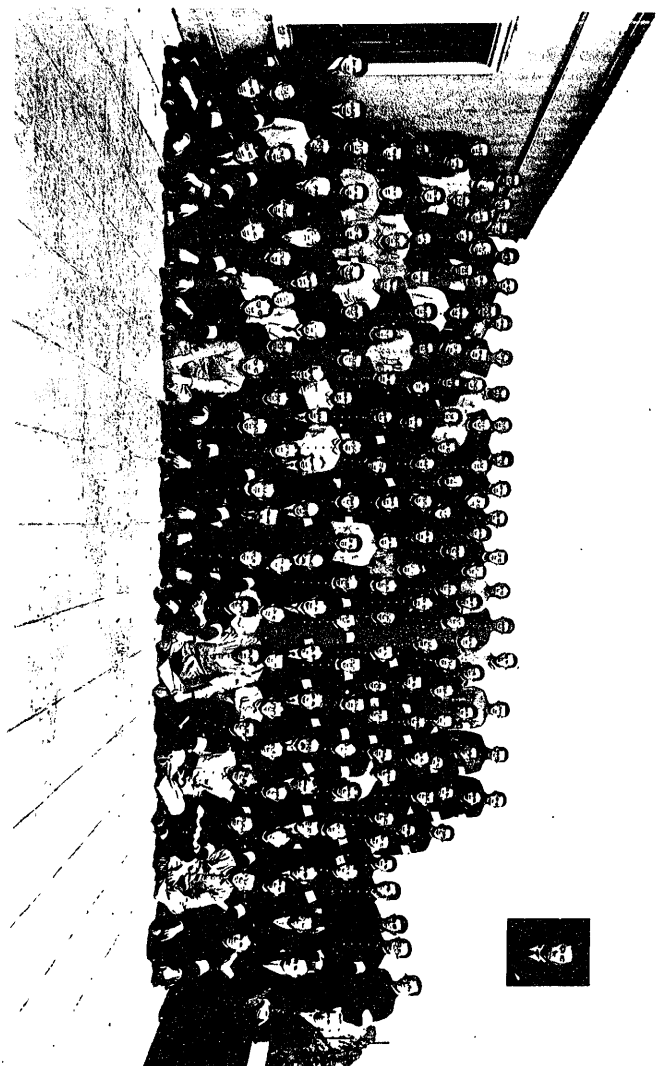
15. 6. 26

H-0 1 8 5

0248

東亞同文會會長 近衛文麿 公	
第三列向ツラ右三人目ヨリ	
中内二郎氏	東亞同文會 監修 大學院大學 教授 中内二郎氏
高橋茂太郎氏	東亞同文會 評議員 高橋茂太郎氏
應見五郎氏	同 同 同 同
神津助太郎氏	同 同 同 同
米田實氏	同 同 同 同
小林隆助氏	外務省文化事業部 助任 小林隆助氏
山田純三郎氏	東亞同文會 評議員 山田純三郎氏
後藤鑑尾氏	外務省文化事業部 第二課長 後藤鑑尾氏
高橋三吉氏	東亞同文會 評議員 海軍大將 高橋三吉氏
矢田七太郎氏	同 常務理事 矢田七太郎氏
本庄繁氏	同 評議員 陸軍大將 易部 本庄繁氏
鶴田定方氏	興亞院 調査官 鶴田定方氏
井戸川辰三氏	東亞同文會 評議員 陸軍中將 井戸川辰三氏
永瀧久吉氏	同 評議員 永瀧久吉氏
中島翼雄氏	同 同 同 同
田鍋安之助氏	同 同 同 同
郡嶋忠次郎氏	同 同 同 同
第二列向ツラ右九人目	
牧田武氏	東亞同文會 主事 牧田武氏

H-0 1 8 5



（一）

（二）

（三）

（四）

東海國文會主催
第二回開々式式八日
西 川 通 徳 忠 大 順 元
中 川 昌 興 徳 順 元
永 田 昌 幸 順 元
井 田 昌 幸 順 元
備 田 昌 幸 順 元
本 田 昌 幸 順 元
大 田 昌 幸 順 元
高 田 昌 幸 順 元
山 田 昌 幸 順 元
小 田 昌 幸 順 元
米 田 昌 幸 順 元
船 田 昌 幸 順 元
藤 田 昌 幸 順 元
高 田 昌 幸 順 元
中 田 昌 幸 順 元
第三回開々式式八日
東海國文會主催 第二回開々式式八日

0250

目次

一、記念撮影

二、概況

三、訓辭及祝辭

一、渡航日程

本會會長	公爵	近衛文麿
外務省文化事業部第一課長	後藤藤	鑑尾
陸軍大將	男爵	本庄繁
海軍大將	高橋	三吉
本會常務理事	矢田七	太郎

以上

同	佐	同	大	同	同	同	同	福	香	德	竹	和	同	山	同	同	廣	岡
賀	分							岡	川	島	中	山	口	島	山			
牟	富	河	戸	丸	藤	赤	益	江	下	近	藤	尾	重	古	今	西	拓	井
田	永	野	高	川	井	司	田	崎	村	藤	谷	崎	田	谷	田	内	植	澤
義	貞	勝	俊	辰	孝	武	憲	太	行	幸	三	茂	倫	英	久	寛	大	
彦	夫	司	夫	生	一	夫	吉	郎	正	彦	郎	夫	甫	夫	持	隆	六	寛

同	同	同	同	大	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
				毎				鐵		繩	島	崎					本	賀
小	山	上	高	松	渡	西	小	木	小	外	比	福	關	宮	廣	井	前	南
川	本	西	田	田	邊	松	下	倉	間	嘉	本	屋	原	松	芹	原	里	
	孝	幹	佐	又	二	喜	康	勉	信	幸	雄	操	政	男	房	人	弘	治
清	雄	一	雄	一	男	雄	宏	勉	信	幸	雄	操	政	男	房	人	弘	治

大	山	熊	兵	香	初	東	鹿	熊	同	同	同	外	同	同	同	同	同	同
阪	口	本	庫	川	木	京	島	本				務	省	鮮				華
三	岩	青	本	平	中	木	木	佐	甲	木	秋	大	高	金	王	李	菊	小
	崎	木	里	尾	西	塚	之	藤	斐	村	山	藤	木	龍	恒	庸	野	島
	千	正		一	貞	金	照	隆	三	吉	郎	夫	郎	洙	哲	琉	夫	九
	雪	視	明	尙	雄	夫	男	人	敏	吉	郎	夫	郎	洙	哲	琉	夫	九

同	兵	同	神	同	同	同	同	同	大	同	京	同	同	東	同	北
庫	川		奈						阪	都	京					海
加	橋	小	廣	上	熊	谷	柊	齋	石	赤	家	長	片	赤	今	高
藤	本	山	長	野	野	山	賢	藤	橋	山	村	島	岡	澤	江	久
美	士	太	敬	太	實	善			久	繁	一	勇	修	壽	七	
治	雄	堯	郎	肇	實	夫	治	博	斗	男	治	夫	雄	二	孝	郎

山	靜	同	同	愛	三	奈	茨	同	群	崎	同	同	同	同	長	兵
梨	岡			知	重	良	城		馬	玉					崎	庫
田	吉	寺	柴	丸	湯	吉	片	峯	高	内	大	川	山	清	本	鈴
中	澤	澤	田	尾	淺	田	岡	岸	瀬	田	石	村	浦	水	田	木
重		敏	敏	鉾	長	正	慶	恒	榮	五	克	好	孝	滋	義	
信	仁	衛	之	忍	二	雄	一	六	一	郎	實	已	孝	滋	義	

同	岡	島	同	島	同	富	石	同	福	同	青	福	長	同	岐	山
	山	根		取		山	川		井		森	島	野		阜	梨
北	大	大	山	山	手	稻	笹	増	宮	佐	柿	花	小	山	藤	志
村	藤	屋	本	尾	林	野	田	田	田	藤	崎	井	松	田	井	村
	英	照	彦	友	和	義	一	守	二	良	弘	彦	彦	造		
求	裕	夫	宏	芳	治	治	夫	範	郎	大	悌	良	弘	彦	彦	造

生徒 (第四十期生)

二

熊 福 山 福 長 熊 福 宮 愛 長 山 大 同 山 同 同 京 北 福
 本 岡 口 岡 崎 本 岡 崎 越 野 口 分 口 都 海 岡
 原 梶 吉 加 小 峽 西 古 奥 黑 伊 中 上 北 山 稻 四 堤 向
 英 原 川 藤 坂 正 明 江 野 澤 藤 士 野 島 本 岡 方 浩 二 貴
 一 藏 郎 和 一 毅 光 郎 雄 夫 一 博 夫 之 方 雄 二 徹 文

神 岐 長 佐 同 福 熊 廣 朝 福 福 福 長 愛 福 初 滋 大 沖
 奈 早 崎 賀 岡 本 島 餅 井 島 岡 崎 知 岡 木 賀 分 總
 清 吉 齋 立 島 吉 原 田 盧 笠 田 尾 酒 鈴 蒲 増 川 池 金
 水 田 藤 川 田 田 田 坂 之 川 部 藤 井 木 地 山 崎 部 城
 德 貝 鐵 正 澄 正 正 博 之 幸 宗 勝 重 惠 謙 雅 信
 藏 雄 彌 文 夫 夫 人 能 鮮 雄 敏 彦 雄 俣 博 三 吉 文 隆

同 東 岡 兵 鹿 福 廣 山 廣 長 茨 靜 同 福 長 福
 京 山 庫 島 岡 島 形 島 野 城 岡 岡 崎 岡
 廣 足 森 上 内 藤 菅 菅 林 松 益 西 中 光 原 江
 川 立 原 田 倉 田 野 野 尾 子 澤 村 安 不 藤
 正 兆 文 吉 義 行 直 作 勳 夫 治 一 信 臣 郎
 夫 郎 雄 猛 憲 行 直 作 勳 夫 治 一 信 臣 郎

訓 辭

東亞同文會會長 公爵 近 衛 文 麿

本日茲に今回全國多數希望者中より選拔せられ東亞同文書院大學豫科に入學せる諸君の招見式を行
 ふは寔に同慶の至に堪へず、又會長として諸君の入學を衷心より歡迎する次第なり。
 同文書院の創立は四十年の昔、明治三十三年に在り、東亞興隆のために活動すべき國士的精神氣魄
 を有し且實用的有爲の人材を養成し、經濟に政治に日支相離るべからざる關係を作り、層齒輔車以て
 西力東漸の趨勢を挽回し、東洋永遠の利益を圖るを以て建學の趣旨となし荒尾、根津兩先生をはしめ
 幾多先覺の士の努力と指導の下に既に二千數百名に上る卒業生を出し、東亞の各方面に於ける第一線
 の活動力を供給し來れるなり。
 今や諸君は傳統に輝く同文書院に入學し、先輩の事業を繼承すべく、將に上海に赴きて學修生活に
 入らんとす、時恰も日支事變を契機として東亞の新秩序を建設せんとする時局に際會し、現地に於て
 研學修養に従ふは寔に時機と環境とに恵まれたるものといふべく、同時に又興亞の大任を負荷する青
 年として諸君の責務や大なりと言はざるべからず。
 諸君は大陸の事情を究むると共に友愛の精神を養ひ、眞に支那國民の信頼敬愛に價ひするの人格を

六
陶治し、日支兩民族の共存共榮、東亞興隆のために貢献せざるべからず。
聊か所懐を述べて訓辭とす。

訓辭

外務省文化事業部第一課長 後 藤 鎰 尾

この度諸君が多数の志願者の間から選ばれて、目川度く東亞同文書院大學の豫科に入學せられることになりましたのは、洵に慶賀に堪へないところでありまして、茲に心から御祝申上げます。

同文書院が如何なる歴史を有する學校であるか、又同文會が同文書院を經營せられます方針乃至抱負が如何なるものであるかと云ふことに就きましては、先刻會長閣下の御訓辭中にもあり、諸君は既に御承知のことと存するのであります。要するに、同文書院大學は、單なる商科大學ではなく、所謂東亞の指導的人材を養成することを目的とする學校であると瞭解してよろうと思ひます。

今や我國と支那との關係は、非常に重大なる時局に際會して居りまして、今後我國は支那に於て活動する有爲なる人材を多数に必要とする時機になつて居ります。この秋に當りまして、諸君は同文書院に入學せられるのでありますから、諸君の前途は洋々たるものがあると同時に、其の責任は洵に重且つ大なるものがあると存じます。諸君は宜しく思ひをこゝに致しまして、御入學の上は、各自その健康に留意すると共に、銳意勉學に努められんことを希望致します。

尙特に希望致したいことは、諸君は在學中に「支那とは何んぞや」と云ふことに就て、大いに研究

八
して、支那に關する正確なる認識を得られるやうにならねることです。私は時々支那通と稱せられる人々から、支那のことは研究すればする程分らなくなると云ふことを聴かされて居ります。支那の正体を掴むと云ふことは非常に困難なことのやうですが、諸君はこれから五ヶ年間支那に留學せられるのでありまして、その間に支那各地の調査旅行にも出掛けられることになる筈でありますから、常に心懸けて支那人と交際することに努め、彼等の心理を解し、支那の實体を掴み、支那に關する正確なる認識を有つやうに努め、所謂興亞の指導者たるの資格を備へられるやうにならねことを特に切望致します。

尙學校の所在地上海は、世界各國人が多數に居住して居ります、所謂國際都市でありますから、諸君は常に自分達は日本國民を代表して居ると云ふ自負を忘れないやうにして、その行動を慎しみ、單に外國人から輕蔑を受けないのみならず、寧ろ、外國人から尊敬を受けるやうになるやう、常に心懸けられたいと思ひます。

以上簡單ながら、所懐の一端を述べまして、御祝勞々御挨拶と致します。

祝 辭

男爵 本庄 繁閣下

私が申すまでもなく、諸君は既に御承知の通り、今日のやうに交通、通信が發達し、又産業は大規模に之を行はなければならず、さうして國際の關係は日に激甚となつて參ります。斯様な時に當りましては、どうしても、狭い範圍では出來ないので、大きな國際的の關係を作りまして、同じ文化のもの、同じ近い種族のものが一つになつて、お互に手を取合つて國土の防衛を共にしその興隆を圖らなければならぬのであります。この意味に於て、私は支はどうしても相提携して進まなければならぬものであると確信して居るのであります。

然るにも拘らず、支那當局の爲すところは、日本の希望する日支提携の意義に反して、排日、抗日の教育を徹底的にやる等、悉く此の提携に相反する行動に出るのであります。茲に於て、やむなく、起つたのが今回の日支事變であります。言ひ換へて見ますと、趣旨から言つても、その他何れの點から言つても、今回の戦ひの如き不思議なものはない、全く欲せざる戦ひをやつて居るのであります。餘儀なく、涙の鐵拳を揮はなければならぬと云ふ情勢になつたのであります。然るに支那の當事者は第三國の勢力を藉りまして、今尙無益の抗戦を續けて居るのであります。さうして或は北より、或は

東より某々強國が、この瀕死の重慶政權、即ち蔣介石政權を支援致しまして、さうしてこの戦争を長引かして居るのであります。此の強國に致しまして、自分の野心を達する爲に、已れの實力を使はずして、唯だ指導者や武器を送つて東亞の同族を相戦はしめ、又た東よりする國に致しまして、物資若くは資金を送りまして、戦をするから見れば、極めて安い値を拂つて、さうして人種を同じくし文化を等しくする者を相戦はしめて、さうして相互に疲れ果て、互にその力を消耗するを待つのであります。而して消耗し切つた時には何をするか分らないと云ふことであります。支那の當局が斯くの如き見え透いたる術策に乗つて、さうしてそれを覺り得ないと云ふことは、吾々日本人にとつては固より支那具眼の士にとつても亦た實に遺憾至極の次第であります。歐洲諸國の如きは、そのアングロサクソンと云ひ、ゲルマン民族と云ひ、ラテン民族と云ひ、スラヴと云ひ、その生ひ立ちそのものから相争つて來て居る國民でありまして、其個々の人種の偏見と云ふものは、恐らく今日如何にしても拭ふべからざるものになつて居るのではないかと思ひます。従つて戦が一つ熄んでも、又次の戦のことなる、之に比べますと、吾々アジア民族は過去に於ても、或は元寇の役とか、日清の役とか、義和團事件と云ふものがありますが、幸ひにしてその怨恨は深くはないのであります。唯、蔣介石が政權を得て以來の彼の排日、抗日の教育、僅々二十年ではありますが其徹底した教育が、何んと云つてよいのでありますか兎に角、恐るべき反感を支那民族に植付けつゝあるのであります。でありますか

ら、吾々が日支提携、相圖つて東亞の復興を目指すが爲には、さうしてもこの誤つたる教育に基いた思想を根底より一掃しなければならぬのであります。さうしてこの思想、この教育を根底より是正致しまするにはまだ抜く可からざる程の深みにはいつてない今の中にあり、而して東亞興隆の爲に戦つてる今日を措いて外にないと私は確信致します。

然るに、事變始まつて以來我が勢力範圍となつた地域内に於ても、向且つ日本を理解しない者が相當多いのでありますが、これらの原因を尋ねて見ます時に、支那側に甚だ誤まつた点が尠なくないのであります。日本側に於ても、亦反省しなければならぬ点が多々あるのであります。即ち日本人は極めて性急で細微に過ぎ、然も優越感を有ち、又利益的にも無理が、或はあるのではないかと思はれるのであります。

數千年の古き文化を有する偉大なる日支兩民族が、東亞に於て押しも押されぬ、何れの國から向つて來ても、撥ね反すだけの力になります。がためには、さうしても、互に反省し互に悪い所を是正して、眞に手が握れるやうにしなければならぬのであります。さうして此際寧ろ戦ひ勝てる強い日本人より進んで、自ら悪い所を是正して掛ると云ふ襟度を示して行きたいものと存じます。

さりとて、私は徒らに支那に媚を呈して、此方から卑下して行けと云ふのではないのであります。凡そ國と國とがお互に親しんで、お互に固く手を握らうとするならば、相手をして、この國と一緒に

なれば頼もしいのである——かう云ふ氣持に相手をせしめなければ、眞の提携は出來ないのであります。即ち頼もしいと云ふ感じを與へしむるためには、日本人は正しく強く進みますと同時に、自らも亦強くなることに専心勤めなければならぬのであります。それが爲には、何んと致しまして、吾人の日本精神はごこまでも向上せしめまうと共に、智力に於ても能力に於ても、將た又体力に於ても、凡ての点に於て負けないだけに已れを練り磨いて行かなければならぬと思ひます。さうして、支那側が、これとならば誠に頼もしい、何處までも手を握つて行きたいと慕ふ様になり、さうして我が方は優越感を有たない、堂々親しみ深い手を差延べると云ふことであれば、如何に支那人がどうであらうとも、私は必ず眞の提携の出來る機會の到來すること有るを信するものであります。

過去の同文書院出身の方々が、日支の爲に盡された功績と云ふものは、洵に多大なるものがあるものであります。私の友人共にも實に立派なる、優秀なる人々が出て居られます。諸君はこれより名譽ある同文書院に入學されて、さうして幾多の先輩の跡を繼ぎ、更に今日の重大なる時局に處して、日支の爲にお盡しにならう、主として支那に於て活動しよう、かう云はれるのでありますから、どうか私の今述べましたやうな事をも御参考の一端に供せられ、自重自愛されて、東亞の復興、日支兩國の爲に愈々努力奮闘せられん事を切望して止まぬものであります。

私は現在の時局が極めて重大な時であります故に、御入學のお祝とお喜びを申すのに代へて、敢

てこの愚見を呈して諸君の御健闘と御成功を祈る次第であります。

訓 辭

海軍大將 高橋 三吉閣下

一四

本日私は測らずもこの席に参りまして、皆様の元氣潑刺たるお顔を拜見して、洵に愉快に感じます。只今、本庄大將のお話になりました通り、我が日本は實に建國以來の一大國難に直面し、又近衛公爵の申されました通り、今日にして吾々がこの難問題を解決しなければ、どうしても、又子孫に迷惑を掛ける、どうしても吾々はやらなければならないのだと云はれました。眞にその通りであらうと思ひます。この秋に際しまして、諸君が遙るく支那大陸に乘出して研鑽努めて、今後日支の間にそれく東亞新秩序の爲に奮闘されることは、洵に意義の有ることと思ふのであります。

元々、日本はこの小さな島國に生れた大和民族でありまして、所謂、海洋國民として今日に至つたのであります。もうこの最近數年間から將來に對しましては、海洋國民だけでは通らない、どうしても、大陸國民であり、又海洋國民である、海陸兩性の人間になつてしまつたのであります。それです。それから、日本人としては、海洋國民として養はれた慍慍であり、又進出の氣性の旺んな、物に屈しないところの、この強いところの精神を有つと共に、又大陸に於ける堅忍不拔、物に焦せられないで行くところの、又困苦欠乏に打つ突かつても堪えたと云ふやうな、この大陸的の強さを兼ね有たなければ

ならないと思ひます。

私はもう別に本庄閣下の後で色々のことを申し上げる必要を感じませぬが、一言申し上げれば、人間は言行が一致しなければならぬと思ふのであります。旺んな理想を立て、大きなことを言つて、さうしてその人の行ひがそれに伴はない——これでは役に立たない。よく皆様お聴きになつて居るかも知れませんが、日本の海軍は沈黙の海軍、であると云つて居ります。諸君も暫くは沈黙の學生であつて、黙々として勉強される必要があると思ふ。餘りに、俺はやると理想ばかり人に言つて、まだ出来もしないことを言つて廣告ばかりして歩くのは面白くない。黙々として努め、黙々として勉強して居る間に諸君の修練が積んで行く、然も修練が積んで、愈々活動の時機に到つたならば、喋べる必要がある時には堂々と喋べりなさい、併し又喋べる必要がない時には口を開かない、一旦開けば人をして感動せしめ、その人の爲にはどうでもなると云ふ立派な意見を述べると共に、又それに伴ふ行動をしなければならぬと思ひます。私は人間としてこれが一番大事であると思ひます。

第二に申上げたいことは諸君の健康である。幾ら立派な考を有ち、幾ら立派な精神を有つて行かうとしても、諸君の身体がそれに伴はなければ、洵に氣の毒ながら出来ませぬ。少しは頭が勝れて居らなくとも宜しいから、身体が大事であると思ひます。身体がよければ、頭も自然と能くなつて来る。兎に角、東亞新秩序建設と云ふこと、この大事業は相當長い年月を要するものである。その長い年月

一五

の間、本當の努力の結晶がそこに結果を得るものであると思ひます。従つて、さう成功を焦せる必要は一つもない。諸君もゆつくり落付いて研究し、修練される必要がある。さうしてうんと立派な身体にして、どんな困苦欠乏にも、口ばかりでなく、本當に堪える人間となり、さうして支那各地から、或は海洋にもお出でになる人もあるであらう、山の中にお出でになる人もあるであらう、それら諸君の性格と体力が適當とする方面に活動されて行く必要があると思ひます。どうか腰を落付けてゆつくり、相手が長いですから、蒋介石と云ふ重慶政府も瀕死の狀態であるか、ないか、能く知らないが、彼は随分氣長く抵抗するものであると思つて居る。此方も氣長く之に對してやる必要がある。この二つを私の饒舌の言葉として差上げまして、切に皆様の御成功、御健闘を祈る次第であります。之を以て私の挨拶を終る次第であります。

告 辭

東亞同文會常務理事 矢田 七 太 郎

只今、會長近衛公の御訓辭、外務省文化事業部第一課長、本庄、高橋兩大將閣下等の御訓辭に依つてそれ／＼充分盡されて居るやうでありますから、私は敢て蛇足を添へませぬ。今日つら／＼考へて見ますと、近衛霞山公はじめ吾々の諸先輩が數十年前舉世滔々歐米模倣、歐米崇拜の時代に時流を抜いた卓見を有つて世の風潮に逆航し色々の困難と戦つて、今日の東亞同文會の基礎を築き上げたのであります。さうして只今色々お話がありました東亞の新秩序と申しますのも、近衛會長の總理大臣たる時の所謂近衛聲明に依つて形付けられ、それに相應じて汪精衛が決然立つて重慶から脱出して今日中央政府を樹立した事は諸君の見らるゝ通りであります。その新政府がこの二十六日成立、其慶賀の爲に特派全權大使として只今赴任の途にあられる阿部大將閣下は、我が同文會の理事長であります。色々考へますと、實に諸君は恵まれた時に、千歳一遇の好機會に遭遇したではないか、私は非常に羨望に堪えないやうな氣持で諸君の前途を祝福するのであります。

抽象的な話だけでは余り頭に残りにならないかも知れませんので、私の体験したこと、將來何か御參考になると思ふことを一二申上げて、私の訓辭に代へることに致します。

私が先年滿洲に居りました時に、諸君の先輩で林出賢次郎氏と云ふ第一期の卒業生があります。非常に支那語がお上手で、支那人に大變に信頼を有つて居ります。この方が、私も前から御懇意でありましたが、今の滿洲の皇帝の特別な御信任を得て、此の方の通譯で私も一週間に一遍か二遍づつは國際情勢に關して御進講をする事となり、名前は御進講でありましたが、本來御進講と申しますと、宮内大臣とか色々の即近の方の顔が並んで、形式も嚴かなものでありますが、私の陛下の十疊ばかりの小さい御書齋でコーヒーなどを頂戴しながら、色々と二時間位お話があつて、結局原稿はポケットに入つた儘で歸つたこともまゝあつた様な次第であります。

色々お話の中に一つ私の心に留めて、今日此處で思ひ付いてお話し上げようと思ひましたことは、或る時私は康德皇帝陛下に、率直にお尋ねしたことがある。一体、滿洲民族の占據して居つた地域は、今の滿洲國で申せば通化省、間島省の一部で、長白山の向ふの邊鄙な所である。土地も余り肥えてない森林地帯、さうして滿洲人は何をして居つたか、今から三百年前には、野生の人參を採集する、馬を飼つて居る、さうして明朝が拵えた馬市が今の遼陽邊にある、そこに馬と人參を持つて行き文化の進んだ明の品物と交換して居つた。さうして明の方が慥巧で狡るいから、滿洲人の人參を色々誤問化して安く買つたりする、さう云ふことに憤慨したことが、滿洲人と漢人である明との衝突の原因の一つであつた。或人は「滿洲は人參に依つて興り、阿片に依つて亡びた」と云ふことを言つて居る。

此の事實でも明白な様に滿洲人の文化が劣つて居つた。この滿洲人が長白山から出て奉天に出、更に山海關から北京に入り、遂に支那四百余州の民を完全に支配した。それ計りでなく、恐らく支那四千年の歴史に於て最も立派な王朝であり、就中、康熙、乾隆時代は漢文化の最高峰に達したと云ふことは歴史家の認めて居るところである。どうしてそんなことが出来たか、例へて申しますと、然も北方の民族としてはその前に元がある。これが成吉思汗の時にはモスコやウイーン邊まで蹂躪して支那を支配すること八十年、然し殆んど残した文化と云ふものが無いと云つて宜しいと思ひます。然るにこゝに滿洲人の世界の歴史にも珍しい大發展、大成功の原因は何處にあるか、一体どうして陛下の御先祖は成功せられましたかと云ふことを御質問したところが、かう云ふことを御答へになられた。

それは二つあると思ふ。一つは皇祖以來歴代の皇帝が非常に漢人種の文化を尊重し、漢人種を優遇し其人材を求めて之を得れば、之に信頼して十二分に手腕を揮はした。政治、財政、産業、文學各方面に亘り皆然りある。それが第一である。第二は、支那四億の民衆の生活の安定向上をを四六時中考へたと云ふことであると申されて、皇帝は本箱の中から康熙、乾隆兩御先祖の日記を持ち來られ、其の中に澤山の詩がある。その時にかう云ふ詩もある、あゝ云ふ詩もある、どうして民を幸福にしようか、どうして民の生活を安定せしむるか云ふことに悩んだ、康熙帝の如き治世六十年、其晩年も民を愛して尙足らざることを恐れて居ると云ふことを書いてある。その二つの事を話されました。私も成程

と理解したのでありますが、その時皇帝陛下は太宗皇帝の二三の逸話を話された。其の一つを申しますと、清朝の關外進出は第一回に於ては失敗して第一世の高祖は、今の山海關邊で戦つて、明が優秀なる新式武器を持つて居つた、それはポルトガル人の宣教師に教はつて立派な大砲を持つて居つた爲め大敗し、皇帝は傷を負つて戦歿された。之を繼いだ太宗皇帝が再び戦つて敗れたのでありますが、最後に錦州の松山と云ふところで、洪文襄、これが明の名將軍として大軍を率ゐて來た。ところが、副將軍が滿洲人の方に内通した爲め洪將軍は生捕にされた、その洪將軍の盛名、人物、忠誠、色々滿洲でも能く分つて居つた。太宗皇帝は非常に大事にした、捕虜と云ひながら優遇して、時々一人坐つて居る室に行つて慰めた。ところが、洪將軍は頑として肯かない。何んの甘言を以てきても應じない。戦ひ敗れて降つたのである。明の爲に飽迄節を全うしなければならないから只死を賜りたいと申し、端坐して北京の方を拜して居る。滿洲の大官連は、苟くも萬乗の君たるものが、一人で捕虜たる囚人の所に時々足を運ぶのは尊嚴を傷付けるものである、お止め下さいと云つたが、併し皇帝は肯かなかった。或る時非常に寒い晩、太宗皇帝が、今夜はこんなに寒くては、洪將軍もサゾ困つて居るであらうと將軍の所に行つた。將軍はウツラ／＼と寒さの爲め震へて居つた。中に入つて、今夜は非常に寒いからお困りでないか、氣になつたから見舞に來たと申して、自分の着て居た皮衣を脱いで自ら將軍に着せた。將軍は驚いて皇帝を仰き見て、暫く呆然として居つたが、やがて襟を正して跪いて、

私は初めて皇帝の誠意を御認めした、今麻の如く亂れて居る明末の民の塗炭を救ふのは皇帝の如き名君でなければならぬ、私は及ばすながら、身命を賭して今後御奉公申上げますと云つた。皇帝は非常に喜んで、翌日各部下に命じてお祝をしようと云ふことになった。ところが皆余りに優遇し過ぎると云つて憤慨した、太宗皇帝が、いや、お前達はまだ知らないが、お前達が私と一緒に苦勞して長白山の中から此處までやつて來たことの目標は何んであるか、吾々は中原に志がある。大業を成して民の塗炭を救ふその爲に色々犠牲を拂つてやつて居るのではないか、併し一度關内に入つて、お前達は盲目同然である。こゝに一人の目開きがある。之を教導として案内させることが非常に大事であると云はれた。そこで成程皇帝の仰有る通りだと云ふので、洪將軍が重用され、其後支那平定の爲めに大いに働いて康熙帝の二十三年に死ぬ迄清朝の重臣として多大の貢獻をした。

私が想ひますのに、東亞の新秩序と云ふことは、結局東亞永遠の平和樹立を目標として居るのであります。東亞永遠の平和を確立するには、日本が少なくとも指導的地位に立つて、四億の民の人心をシツカリと握ると云ふことが絶対に必要である。清朝の例を取つて見ましても、その後百年、百五十年経つて、長髮賊の亂が起つた時に、外國から侵襲して來た夷狄たる滿洲朝を亡し、漢人種を興すと云ふ極めて尤もな、漢人種に向くスローガンで起つて北伐して武昌、武漢を陥れ南京に都して十五年も續いた、その時に滿洲の旗本である旗人は役にたゝなかつた、此の長髮賊を敗つて清朝を救つた

二二
のは誰か、漢人種である。湖南の曾國藩、安徽の李鴻章等の地方の豪族が壯丁を集めて、義勇兵を作り此の大亂を平定したのであります。之れは即ち四億の民の人心の奥深く清朝の先祖以來の余徳が及んで居つたからである。

東亜新秩序と言ひ永遠の平和と云ふ言葉は簡単に云へますが、然らば其の平和を確立する事を實行に移せば容易ならぬ大事業であります。而も極めて地味な事業であります。東洋平和と云ふ大きな殿堂を造るにしても、地均もしなければならぬ、土台石も運ばなければならぬ。材木も持つて來なければならぬ。さうして出來上つたものは、實に堂々たるものが出來るであります。併し出來上る迄の苦心努力は並大低のものではないのであります。

私は恰度この恵まれた機會に同文書院に入學された諸君は、太宗皇帝の言はれたやうに、支那に行つて本當の支那を知り、本當の支那人を理解し、さうして日支提携と云ふ大きな事業を成す爲めに、今日の盲目の手引となり、自分達が導いてやる、自分達が手を取つて導いてやる、指導者であると云ふ氣持で、本當の支那を握むと云ふことを、今後十分に心懸けて勉強して貰ひたい。或は今の時局に於ては天下が色々騒々しいから、時局に就て色々關心を有つことも尤もであります。只今の訓辭にもありました通り、學生は脇目もふらず基礎的知識を涵養し、精神を陶冶し、肉体を鍛鍊して他日の雄飛に備へねばならぬ、之れは若い時でなければ駄目である。今の中に基礎的知識を握んで、東洋永遠

の平和の殿堂建設に就て、最も有効な、有意義な貢獻をすることを考へなければならぬ。生はんかに、十分の準備もなしに飛出すやうでは、好い加減のものになる、本當の準備をしなければならぬ。それをこれから五年間に十分叩き込んで、私が勉強すると云ふのは、學生間で言ふ勉強と云ふ意味ではない。もつと廣い意味である。この千歳一遇の機會に遭遇する事だけでも青年の心を感激せしむるのである。よく考へて御覽なさい。かう云ふ時機に支那に行つて、本當に支那を研究して、日本の歴史にも、東洋の歴史にもない大事變に、間接、直接に参加出來る機會を與へられた、こんな愉快なことはないと思つたら、十分に自分の体を大事にして、奮勵努力せられんことを希望する次第であります。之を以て私の訓辭を終わります。

昭和十五年
東亞同文書院大學豫科新入生渡航日程

二四

四月十八日(木)

午後三時迄ニ東京市四谷區饗ヶ丘十一 日本青年館ニ集合
着京届出、學費金其他納入、引率者訓辭渡航心得示達

十九日(金)

午前宮城拜禮、午後二時招見式
午前新宿御苑拜觀、午後自由見學

二十日(土)

午前近衛霞山公、荒尾東方齋先生墓所參拜

二十一日(日)

午後九時四十五分東京驛發

二十二日(月)

午前九時十一分山田着、伊勢大廟參拜、午後三時七分山田發、同五時三十三分京
都着(菊岡屋)

二十三日(火)

午前京都御所、二條離宮拜觀、午後桃山御陵及故根津院長墓所參拜、市内見學(菊
岡屋)

二十四日(水)

午前六時二十分京都發、橿原神宮畝傍御陵參拜(菊岡屋)

二十五日(木)

午前八時三十分京都發、同九時十一分大阪着、正午滬友同窓會歡迎會

二十六日(金)

午後四時十四分大阪發、同四時四十三分三宮着(後藤旅館)
午前九時乘船(汽船瀧田丸)

二十八日(日)

上海着

以上

二五

H-0 1 8 5

0264